

復活節第6主日礼拝説教「《神の子》という霊性」予稿

日本基督教団石神井教会 2026年5月10日

【旧約聖書日課】創世記 18章23～33節

²³アブラハムは進み出て言った。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒には減ぼされるのですか。²⁴あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも減ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。²⁵正しい者を悪い者と一緒には殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなされるはずはございません。全くありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか。」²⁶主は言われた。「もしソドムの町に正しい者が五十人いるならば、その者たちのために、町全部を赦そう。」

²⁷アブラハムは答えた。「塵あくたにすぎないわたしですが、あえて、わが主に申し上げます。²⁸もしかすると、五十人の正しい者に五人足りないかもしれませんが、それでもあなたは、五人足りないために、町のすべてを減ぼされますか。」主は言われた。「もし、四十五人いれば減ぼさない。」²⁹アブラハムは重ねて言った。「もしかすると、四十人しかいないかもしれませんが。」主は言われた。「その四十人のためにわたしはそれをしない。」

³⁰アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならず、もう少し言わせてください。もしかすると、そこには三十人しかいないかもしれませんが。」主は言われた。「もし三十人いるならわたしはそれをしない。」

³¹アブラハムは言った。「あえて、わが主に申し上げます。もしかすると、二十人しかいないかもしれませんが。」主は言われた。「その二十人のためにわたしは減ぼさない。」

³²アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならず、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、十人しかいないかもしれませんが。」主は言われた。「その十人のためにわたしは減ぼさない。」

³³主はアブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムも自分の住まいに帰った。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 8章22～27節

²²被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。²³被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。²⁴わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。²⁵わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

²⁶同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。²⁷人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 16章12～24節

¹²言っておきたいことは、まだたくさんあるが、今、あなたがたには理解できない。¹³しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語り、また、これから起こることをあなたがたに告げるからである。¹⁴その方はわたしに栄光を与える。わたしのものを受けて、あなたがたに告げるからである。¹⁵父が持つておられるものはすべて、わたし

のものである。だから、わたしは、『その方がわたしのものを受けて、あなたがたに告げる』と言ったのである。」

¹⁶「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」¹⁷そこで、弟子たちのある者は互いに言った。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言うておられるのは、何のことだろう。」¹⁸また、言った。「『しばらくすると』と言うておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」¹⁹イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。²⁰はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。²¹女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。²²ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。²³その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきり言うておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。²⁴今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

《真理の霊》【こども説教のために】

イースターにご復活くださり弟子たちの間に現れてくださった主イエスは、四十日間、弟子たちと共にいてくださいました。その間に、弟子たちは、主イエスが共に旅をされたときに教えてくださったこと、お示しくださったことを、次々に思い起こさせていただいたことでしょう。けれども、ご復活の主イエスは、弟子たちを残してまもなく天に昇って行かれるのです。その残していく弟子たちのために、主イエスは、天の御父が聖霊をお送りくださるという約束をしてくださいました。

天の御父が遣わしてくださる聖霊は、弟子たちを導いて真理を悟らせる《真理の霊》です。「聖霊が…すべてのことを教え、(主イエスが)話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(ヨハネ 14:26) のです。聖霊がおいでくださるといことは、たとえ主イエスを見ることができなくなっても、主イエスがそこにいてお会いくださっているのと同じ状態にさせていただく、ということなのです。

いいえ、実際には、それ以上のことです。聖霊をお送りいただいた弟子たちは、もう主イエスに一つひとつをお尋ねしなくてもよいのです。天の御父に直接願うことができるようにされるからです。主イエスが天の御父と親しくお語りになり、何でも直接願われるお方であったように、聖霊をお送りいただいた者は、主イエスのようにされて、天の御父と親しく語り、何でも直接願うことを許されるようになるのです。

主イエスの名によって願う

先週、先々週と二週続けて水曜日の集会を休会としました。祝休日は休会としているのです。けれども、もしかすると、祝休日であれば参加できるのにお考えの方もあるかもしれません。もちろん、祝休日でも日中、会堂の入り口は開いていますから、集会がなくてもおいでいただいてよいのです。

教会においでの方のほとんどの方が、日曜日の午前中にしかおいでになりません。日曜日の朝、共に集い礼拝にあずかるのが、教会が何よりも大切にしている営みですから、そこに皆さんがおいでになるのは、自然なことです。キリスト教に関心があって教会に行ってみたいという方があれば、まず何よりも、日曜日の礼拝にご案内することでしょう。

中には、初めから礼拝はハードルが高いからと、入門講座のようなものに参加することを要望される方もあります。確かに、礼拝は順序に従って次々に進められて行きますから、戸惑うこともあるかもしれません。また、それぞれの教会ごとに異なる礼拝習慣もありますから、信者であっても他の教会の礼拝に出席しようとするときには、少し身構えてしまうものです。

そうだとしても、やはり、初めておいでいただくのは、日曜日の礼拝がよいのです。ここに、教会のすべてが詰まっている、と言ってもよいからです。その上で、平日の教会にはいつおいでいただいてもよい、と申し上げたいと思います。ふらっと立ち寄り、礼拝堂でしばらく一人静かに祈って帰られる方があります。集会が休みであることに気づかずにおいでになられても、礼拝堂で祈りのときを過ごして下さったらよいのです。

礼拝堂は、聖なるところです。皆さんが日曜日ごとに集められてきて、神の御前に頭を垂れ、御言葉に耳を傾け、讃美と祈りをささげられるところだからです。ここには、皆さんが、そして先達が、神の御前に頭を垂れた記憶があります。御言葉に耳を傾け、讃美と祈りをささげられた歴史があります。

礼拝堂に出入りされる時、必ず一礼される方があります。わたしたちの教会では必ずしも習慣となっていないませんが、教会によっては大切な習慣です。教会が共に祈りを集めてきた聖なるところに敬意を向けてくださっているのです。ここで御前に立たせていただくお方に対する崇敬をお示しくださっているのです。

「あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる」と、主イエスは言われました。わたしたちは、主イエスによって導かれて、天の御父の御前に進み出る者とされ、御父に直接祈り願う者としていただいていたのです。

ここで、「天の父」と神をお呼びいたします。主イエスの名によって願います。そのように祈りを重ねてこられた先達に、わたしたちも続くのです。

《神の子》とされるために

通りすがりに教会を見つけてくださり、見学させてくださいと言って、入って来られる方があります。礼拝堂にご案内すると、「どこに向かって祈るのですか」と尋ねられる方があります。

皆さんはここで、どこに向かって祈られているのでしょうか。ここには、寺院のような仏像はありませんし、神社のようなご神体也没有。もちろん、聖壇正面には十字架が据えられています。その下には『聖書』が置かれています。わたしたちは確かに、十字架や『聖書』に対する崇敬というものがあるのでしょうか。それ自体を拜んでいるわけではなくても、十字架や『聖書』は、わたしたちを主イエスと結びつけ、神の御前に進み出させる、大切なしるしであり、道標です。

けれども、教会によっては、礼拝堂に十字架を掲げないこともあります。わたしの育った教会の礼拝堂には十字架が掲げられていませんでした。母教会の会堂は献堂からまもなく50年になりますが、今さらのように、その礼拝堂に十字架を掲げるかどうかということを、教会全体で議論しているのだそうです。十字架のしるしの意味を、あらためて問い直されているのでしょうか。

ここに掲げられる十字架に、磔にされた主イエスのお姿があれば、礼拝堂に入って来られた方は、そこに向かって自然と祈られるのかもしれませんが。それはそれで、貴いことかもしれません。けれども、わたしたちの礼拝堂に掲げられた十字架には、磔にされた主イエスのお姿がありません。わたしたちがここで真に向かおうとしているお方は、天の御父だからです。主イエスに導かれて、主イエスと共に、しかし主イエスにお尋ねすることなしに、わたしたちはここで、天の御父の御前に進み出て、祈るのです。そうすること、主イエスが道を整えてくださったからです。

まもなく、主イエスが約束くださった聖霊の降臨を祝うときを迎えようとしています。「父なる神」と「御子イエス・キリスト」と「聖霊」は、等しく礼拝される三位一体の神です。それでも、主イエスは、「その日には、あなたがあたはもはや、わたしに何も尋ねない」とおっしゃられたのです。天の御父と一つであられる御子イエスは、わたしたちも御父と一つになることができるようにと、聖霊をお送りくださるといなのです。

使徒パウロは、わたしたちが「アッパ、父よ」（ロマ8:15）と神をお呼びする霊を与えられ、「神の子」とされ始めていると教えました。わたしたちの姿は、「神の子」と言うにはあまりに不完全かもしれませんが。それでも、すでに「天の父よ」とお呼びする霊を与えられているのです。主イエスと結ばれることで、「神の子」として新たに生まれ、新たに生きるようにされてきたのです。今は、大胆に、天の父に願ってよいのです。